

明治から昭和初期にかけての カトリック司祭像

青 山 玄

第二ヴァチカン公会議の教父達は、『司祭の役務と生活に関する教令』の中で、カトリック司祭の使命および任務について、またその生活について数々の美しい言葉を連ね、司祭の理想像を描写しているが、その中で司祭の独身性についても次のように述べている。

「(前略)独身は多くの点で司祭職にふさわしい。事実、司祭の使命は死の征服者キリストが自分の霊によって世にもたらした新しい人間、〈血によらず、肉の意によらず、人の意によらず、神に〉(ヨハネ、1の13)起源をもつ新しい人間の奉仕に身をささげることである。天の国のために守る童貞または独身によって、司祭は新しい崇高な理由からキリストに身をささげ、分裂のない心をもってよりたやすく主に一致し、主において、また主を通して、より自由に神と人々とに対する奉仕に身をささげ、主の国と超自然的更生のわざに身軽に仕える。こうして、キリストにおいて父性を豊かに受けるために、一層ふさわしいものとなる。……云々」¹⁾

公会議教父達は、続いてキリストの崇高な使命に基づくこれらの理由から、カトリック司祭に独身を義務づけている法を新たに承認すると共に、神の恵みに信頼し、キリストの模範に従って一生独身で生きることを受け入れたすべての司祭達が、その司祭独身性の賜物の偉大さを認識し、心から愛し、忠実に守り続けるようにと勧め、すべての信徒にも、この尊い賜物を大切にし、神が教会にこの賜物を豊かに与えてくださるよう祈ることを求

めている。²⁾

しかし、この公文書がまだ審議中であった 1964 年から、司祭職を離れたカトリック司祭の数は急増し始め、1970 年前後には全世界で年間 3,000 名を越えたが、その後は漸減して 1973 年に 1,868 名、1974 年に 1,778 名となり、³⁾ 1980 年代に入って漸く激減の危機が過ぎたとの印象を与えている。カトリック司祭の数が一番減少した時でも、教区司祭と修道司祭とを合わせてなお 40 万はいたのであるから、聖職から離れたのは結果的には全体の中の少数部分だけであったが、それにしても 1970 年を中心とした前後 10 数年間にこれ程多数の人が司祭職から離れたのは、教会にとっては大打撃であり、二度とこのような現象が発生しないようその原因を反省し、対策を講じておく必要がある。主要原因は、一応社会の急激な発展と影響力の増大によって従来の価値観や理想像が極度に相対化され、多くの人が司祭職の中に自分の生き甲斐を見失ったため、と言ってよいであろうが、問題は、多くの人が司祭職から離れた直接の原因が何であったかよりも、従来の司祭像のどこに弱みが隠れていたかを、あらゆる角度から究明することにあるのではなからうか。

本稿は、このような原因究明のため一つの参考資料を提供する意図から書かれたものである。聖職から離れた人が皆、カトリック司祭の独身性を守ることが難し過ぎて離れたのではない。しかし、少なくとも一部の人々にとり、この独身性の遵守が司祭職から離れる一因となっていたことは否定できない。そこで後半部分では、多少司祭と女性との関係を大きく取り上げながら、我が国における明治から昭和初期までのカトリック司祭像の変遷と問題点について考察して見たい。

A 明治前半の社会状況とカトリック司祭像

フランス革命とその後のナポレオン戦争によって、民主主義思想が普及した後の 19 世紀中葉の西欧には、民主主義的「自由」の思想とキリスト教

信仰とを結合して、教会活動をもっと近代知識人や民衆の心に根差した実りあるものにしよう、と画策した進歩的カトリック聖職者・知識人が非常に多くいた。その代表として、一方では、1830年10月に「神と自由」をモットーとした「L'Avenir (未来)」という雑誌を創刊したフランス人のラムネーとその同志、ジェルベール、ラコルデル、モンタランベールら、ならびに彼等と同様の進歩的教会活動が続けたデュパンルー、ファルー、オザナムらを挙げることができるし、他方では、詳細な歴史研究に基づいてカトリック神学と教会活動の近代化を画したドイツ各地の大学教師ドライ、マーレル、ヘフェレ、デーリングエルらを挙げることができよう。更に英国では、同じく歴史研究に基づいて、1833年以来所謂「オックスフォード運動」を盛んにし、あわせて近代人のため信仰生活刷新の道を模索していたニューマンらもいた。いずれも当時の西欧社会一般に普及した自由主義的あるいは民主主義的思潮の中に降り立って、国内国外の様々な保守勢力からの圧力に抗しながら、社会を福音化するための新しい道と、新しい教会像とを模索していたという点、および新しい社会造りを目指す若さと力に躍動していたという点では、一致していたと言えよう。⁴⁾

この新しい建設意欲と活力のみなざる西欧社会で青年期を過ごし、宣教師を志願して来日した明治前期のカトリック司祭達は、安政5(1858)年に日本と欧米諸国の間に締結された修好通商条約とその後の法令による日本政府からの保証、および西洋の高度に進んだ文明文化を背景にして、一般に日本社会の過度の保守性・閉鎖性を打破し、もっと外来文化に開かれた新しい社会造りを推進しようと、かなり大胆に努めており、カトリック伝道も、この日本社会近代化の努力と結んで進めていたと言ってよい。当時の宣教師達のこのような高飛車の姿勢を立証するエピソードは、断片的ながら数多く伝えられているが、次に二、三その例を挙げて見よう。

我が国でまだ「切支丹宗門之儀ハ是迄御制禁之通り固ク可相守事」という慶應4年3月太政官発令の高札が掲げられ、三千数百名の浦上キリシタンが西日本各地に配流されていた頃の明治4年の夏、バリー外国宣教会の

マラン（Jean-Marie Marin, 1842～1921）神父とミドン（Félix Midon, 1840～93）神父は、既に東京・築地の外国人居留地内の借家を拠点にして、同年7月14日に出された廃藩置県の詔書のため生活に窮した諸藩の藩費留学生達の生活や語学学習の世話をしながら、半ば公然と伝道活動を始めていた。翌1872年2月18日（明治5年2月10日）、プティジャン司教は外国宛の手紙の中で、このことについて次のように報じている。

「私たちは、隠れた生活から抜け出し始めています。大きな首都江戸で、私たちは今のところヨーロッパ語学習のための学校を一つもってありますが、そこには既に200人以上の学生がいます。二人の宣教師がこの学校の上層指導を担当し、フランス語を教えるのに一生懸命です。そこには英語とドイツ語のためにも、俗人教師がいます。江戸でも横浜でも、私たちは、病人の世話と幼少年の教育、特に女子教育のために、修道会経営の施設を設立しようとしています。神がこれらの事業を祝福してくださるならば、私たちは、間もなくすばらしい活動の場を持つようになるでしょう。」⁵⁾

我が国の維新政府が、不平等の条約を改正して豊かな強い国造りをするには、単なる開国の段階から更に進んで積極的に欧米の国家制度を導入しなければならぬことを悟り、廃藩置県を断行した直後に、カトリック宣教師たちがすぐ前述のような一種の私塾を創立し、国法違反の嫌疑をかけられることも恐れずに、密かに青年層に対する伝道を始めた強気の進取性は注目に値する。

この私塾は、明治5年の春に現在の千代田区三番町に移され、一般には「ラテン学校」と呼ばれていたが、既にこの頃から太政官の諜者が忍び込んで宣教師や学内の動きを政府に報告していた。しかし、宣教師はそれを知ってか知らぬでか、同年8月27日（陽暦9月29日）に2名、9月30日（陽暦11月1日）に3名、翌6年1月6日に3名、2月12日に4名と次々と青年達に洗礼を授けており、この学校での受洗者は明治6年の終わ

りまでに 72 名に達している。キリシタン禁制の高札が撤去されたのは、明治 6 年 2 月 24 日付太政官布告第 68 号が出てからであるから、それ以前の授洗は明らかに法令違反になるが、欧米列強の好意的支持を受けていた宣教師達は、もしこのことで政府から咎められたら、それを機会に、維新政府に対して欧米並の信教の自由を各個人に認めるよう、強要するつもりでいたのかも知れない。⁶⁾

日本政府の膝元である東京においてだけではなく、地方都市や農村においても、当時の宣教師達は同様に行動していた。例えば、明治 8 年 8 月から 14 年の春まで新潟県で布教したドルワール・ドゥ・レゼー (Louis Fr. Aug. Drouart de Lézey, 1849~1930) 神父は、同 9 年 3 月、新潟から 30 キロ余り離れた松浦村八幡の名主大江雄松が新潟で自分の話を聞いて改宗する気になると、早速自分の伝教士〔伝道士のこと〕新城信一を彼と共にその郷里に近い古い城下町新発田に遣わし、家賃を前払いにして借家の説教所を開くことにした。ドルワール神父の回想録によると、二人は家賃を前払いにして契約書を取り交わしたが、警察は間もなくそこに異人が来ると聞いて家主に家賃を返却させ、解約させてしまった。二人は新発田警察署のこの思わぬ強気の保守主義に当惑したのか、その事をドルワール神父に知らせずに、暫く八幡の大江宅で休んでいた。

一方、一週間待っても知らせがないので心配したドルワール神父は、8 日目に徒歩で新発田に赴き、夕刻遅くあらかじめ聞いていた貸家に着いた。しかし、戸を閉じ貸家札を貼ってあったので、隣家に尋ねたら、その家には借人があったそうだが、移って来ないので家主がまた貸家札を貼った、とのことであった。二人は警察に拘留されたのではないかと益々不安になった神父は、一時も早くその消息を知りたいと思って人力車を雇い、八幡に急がせた。町の本通りまで来ると巡査に呼び止められ、横柄な口調で「貴下は誰だ。何処へ行くか」と訊問された。心中穏やかでなかった神父も、負けずに「何故吾を止めるか。日本と外国との条約を知らんのか。新潟の 10 里四方以内には、免状がなくとも外国人が旅行するのは条約の許す

所だ。当新発田は、新潟を距る約7里である。吾が旅行の自由を妨げる権利はない。車夫、構わず遣れ」と横柄に答えた。すると巡査は車に手をかけ、車を遣ってはならぬと命じ、再び誰で何処へ行くかを質した。こうして暫く喧嘩のような押し問答が続き、多くの見物人が車を取り巻いた。そこで神父は、「かような調べは不法である。が、今は急ぐから止むを得ず応じよう。しかし、後日在京の吾が公使に訴えるから、あなたの名刺を出しなさい。そうしたら私の名刺を上げ、また行き先地を明かしましょう」と答え、名刺を交換し、行き先地の八幡であることを告げ、一礼もしないで別れたという。暗くなって八幡の大江宅を捜しあて、家に入って見れば何の異常もなく談笑している二人に会い、喜んだり呆れたりしたが、安心してそのままそこに泊まったら、翌朝大江氏から、「昨夜は何故か見知らぬ人が、夜更けてから家の周りを警邏するようだったが、思うに貴師がこの家に泊まったかどうかを、見届けに来た探偵に相違ありません」と告げられた。そこで神父は新発田警察署長に面会し、警察の許可なしに旅宿以外の所に宿泊したという、外国人の内地旅行に関する規則違反を詫びてから、新潟に戻った。数日後、新潟県庁との間に面倒な交渉はあったものの、規則違反が処罰されなかったので、神父も新発田の巡査のことを公使に届け出なかったという。

しかし、神父を宿泊させた夜の大江宅は、警察から駆り出されたのか、竹槍で武装した村民達に包囲されていたそうで、宿主大江は神父の帰ったその日に新発田警察署に喚問され、猿橋村の岩村金蔵方で5日間監禁された。大江がこれらの事の次第を同年4月6日付で県庁に報告した覚え書きが、現在に伝えられている。彼はこの事件直後の4月10日に、自分が監禁されていた岩村金蔵方で布教講演会を開いており、5月25日に受洗した。新城伝教士も4月22日に新発田町に来て伝道し、翌10年この町に巡回教会を設立した。いずれも、当時の宣教師の積極的伝道精神に鼓舞された活動であろう。⁷⁾

カトリック宣教師達が、このようにして種々の困難にひるむことなく、

封建的社會の門戸を解放させよう、そして日本人にキリスト教的真理に基づく新しい社會造りをさせよう、と積極的に日本社會に乗り出し、人々に働きかけていた明治前期は、欧化主義が風靡した時代でもあったので、教勢は明治 10 年頃から急速に伸長した。その要因の一つは、自分の知人や教え子達、ならびにその親戚、友人、知人關係などを巧みに利用しながら、一般社會との摩擦の少ない個人宅や借家での家庭的集いの場で教えを説き、そういう個人宅でミサやその他の祭儀をも挙行していた宣教師達の旺盛な伝道精神であるが、しかし同時に、こういう巡回宣教師を迎える信徒の自主的伝道活動も一つの大きな要因であった。潜伏状態から復帰した九州の信徒を除くと、教會には一般に士族出身者または農村から都市部に転居したような進歩肌の信徒が多く、しかもその過半数は男子信徒なので、信徒団全体が若さと自主性、向上意欲と伝道意欲などに溢れていた。この点、当時の信徒団はキリシタン時代の信徒団によく似ているが、信仰実践面の傾向でも、よく似ていたようである。聖書研究を重視して伝道師の薫陶を受ける機会も多かったプロテスタントと異なり、当時のカトリック信徒は、實際上数少ない宣教師の指導を受ける機会も稀なので、入信の初期には基本的教理の理解に努めても、次第に神の恵みを受けるための掟の遵守とロザリオの祈りを重視し、信徒相互の助け合い、慈善活動などによる信徒団形成を優先する傾向が強かったようである。ちょうど古い幕藩体制が崩れた直後で人口移動も激しく、地域共同體の結束も仏教諸派の活動も弱まっていた時なので、知的活動に向いていない人にもできるこのような助け合いグループの形成は、時宜に適っていたのかも知れない。⁸⁾

保守的な周辺社會に対しては進歩的開化を唱道しつつ、教會内では男子信徒中心のこのような暖かい助け合い集團造りが自主的に進められていた建設的状況の中でのカトリック司祭達は、頻繁な巡回旅行の苦勞は大きくても、心の通う新しい社會造り、信徒団造りの希望と喜びに支えられていたようで、それは彼等の書いた手紙や年次報告の中にも反映している。従って、こういう希望と喜びの生きている布教事情の中で働く限り、彼等がカ

トリック司祭の独身性に悩んだことは殆どなかったのではなかろうか。事実、筆者の調べた限りでは、当時のカトリック宣教師で病気その他の事情でフランスに帰国した人はあっても、女性問題が話題にされたような人は一人もいない。しかしこの布教事情は、明治 20 年代に入ると、西欧の側からも我が国の側からも、次第に大きく変えられるに至った。

B 明治中期における状況の変化とカトリック司祭

状況の変化は、まず西欧で始まった。ローマ教皇ピオ 9 世（1846～78）は、登位以来進歩的民主主義者達の声に耳を傾けつつ、可能な限り大きく心を開いて人民の期待に沿う新しい社会造りに励んだにも拘わらず、それが裏切られ、1848 年 11 月 24 日から 1850 年 7 月初めまで、1 年半余りも亡命の苦勞を余儀なくされた後には、自己中心・人間中心の近代精神や近代思想を千数百年来の信仰の遺産を改変または廃棄する大敵と見なし、既に西欧各国に広く普及しているその危険な精神的害毒を、神からの權威に服する神中心主義の精神で超克する道を模索し始めた。

そしてまず聖母マリアの清い心を称揚しつつ、1854 年 12 月 8 日に聖母の無原罪の御やどりを信仰箇条として荘厳に宣言し、それが 1858 年 2 月 11 日以来フランス国のルルドで度々出現した聖母の言葉と数多くの奇跡的治癒によって裏づけられ、一般カトリック界の世論が、神から与えられている教皇の靈的權威に益々注目する方に向かい始めると、今度は 1862 年 6 月 8 日の聖霊降臨祭に、司教 322 名、司祭約 4,000 名を聖ペトロ大聖堂に集めて、既に一部は 1627 年に、残りは 1629 年に列福されている日本 26 殉教者の列聖式を盛大に挙行了。すると 3 年後の 1865 年 3 月に、長崎県に潜伏していた多くのキリシタン達が発見され、密かにカトリック宣教師の指導の下へ戻り始めたので、一般の世論は、またも教皇のもつ權威に不思議な導きの神秘を覚えた。この同じ 3 月、教皇は秘密裡に公会議準備委員会を発足させ、ヨーロッパ各国の司教のうち 36 名に秘密書簡を送って、

公会議開催の準備が密かに進められていることを告げると共に、公会議で取り上げるべき主要議題について意見を求めた。司教達の返答は殆ど皆、神・信仰・天啓の真理・各種近代思想の誤謬・ローマ教皇の権威・ガリカニズム・秘跡・宗教教育などについての教会の教えを現代人のために明確にすることや、規律の整理肅正を強調しているが、それに加えて司教数名は、〈教皇の不可謬性〉についても取り扱うことを提案した。⁹⁾ こうして公会議開催の準備が進められた後の 1867 年 6 月 29 日、教皇は 30ヶ国から募集した 500 名近い司教、および 1 万名余の司祭の前で、使徒聖ペトロと聖パウロの殉教 1800 周年記念祭を挙行し、その式典中に、近代社会を重圧している種々の害悪に対して効果的治療手段を提供するため、公会議を召集する準備が既に進められていることを発表した。数日後の 7 月 7 日、教皇は更に日本 205 殉教者の列福式を挙行し、危険思想の多い近代世界の中で、殉教精神で信仰の遺産を守り抜く決意を表明した。¹⁰⁾

教皇ピオ 9 世が積極的に主導したこのような流れの中で開催された第一ヴァチカン公会議 (1869 年 12 月 8 日～1870 年 7 月 18 日) は、同教皇の危険視した多くの近代思想を排斥し、ローマ教皇の首位性と教義的不可謬性を宣言して、結果的には教皇への従順と、教皇の指導の下での全カトリック教会の一致団結を極度に強調する、一種独特の国際的画一主義の流れを生み出したが、この流れは、布教地のカトリック伝道にも重大な影響を及ぼした。

例えば教皇庁内の布教聖省は、1879 年 6 月 23 日付の教令により、各布教地毎にそれぞれ数名の司教が相集まって地方教会会議を開催し、布教地における信仰実践を細かく規定することを命じているが、これは、何よりも第一ヴァチカン公会議の精神に準じて、教皇の権威の下に全世界のカトリック教会を堅く一致団結させ、信仰の遺産を強い遵法精神で護持させること、並びに信徒の自主的伝道活動により多様化しつつあった布教地の教会に対して、教皇庁が法規を細かく定めて指導し易くすることを、意図したものであると思われる。当時司教 2 名の我が国は、司教 1 名の韓国と合

同で教会会議を開くことになったが、布教が再会されてまだ年月が浅いことやその他の理由で開催が遅れ、明治23(1890)年3月2日から29日まで、潜伏キリシタン発見の25周年記念も兼ね、長崎でその教会会議が開催された。¹¹⁾

この時議決された法規には直接間接に教皇庁側からも手加えられたので、それが明治26年に公布施行されると、信仰生活を具体的に監視拘束する多くの細則のため、布教地におけるカトリック教会の西欧化が進み、どこに行っても規則に忠実で宣教師の指図に従順な、自主性に乏しい受動的信徒が多く見受けられるようになった。同じく種々の規則によって教会内の信徒や求道者に対する指導監督を義務づけられた宣教師が、町から町へ、村から村へと数週間かけて巡回旅行をすることも、信徒の家で洗礼式やミサを挙行することも殆どなくなったので、司祭の在住する教会堂または頻繁に来訪する巡回教会から遠く離れた地方に住む信徒で、カトリック教会から離れた者も少なくなかった。¹²⁾

上述した長崎教会会議の教令は、5年後の明治28年4月28日から5月12日にかけて、同様にして東京・築地教会で開催された第一東京教会会議の教令により更に補足強化されたので、この状態はその後も長く続いた。明治後半と大正前期のカトリック統計を調べると、毎年平均して約1,000名ずつ信徒数を増やしているのは長崎教区だけで、これは恐らく人口の自然増加によるものと思われるが、それまで一応順調に教勢を伸ばして来た他の3教区、即ち東京教区は信徒数8,000乃至9,000名台を、大阪教区と函館教区は3,000乃至4,000名台を20年間以上も足踏みしている。¹³⁾多くの教会で女子信徒数が男子信徒数より多くなったのも、この明治後半期からであった。

大都市圏を除き、伝道活動がこのようにして衰退したのには、明治22年2月の明治憲法や翌23年10月の教育勅語発布に始まる日本社会の変化も、大きな原因になっていた。明治10年代には条約改正のために、日本政府が国民に大きな犠牲を強いてまでも、腰を低くして欧米列強への奉仕と

機嫌取りに努めたのに、相手国の方では要求を積み重ね交渉を長引かすだけで、なかなか歩み寄って来てくれない、こんな弱腰の改正交渉ではいつまで経って埒があかないというやるせない気持ちが、一部の民衆の間にキリスト教に対する反感を昂らせ、千葉県流山町では既に明治20年の冬から春にかけて、「愛国社」と称する右翼団体によるキリスト教徒迫害が発生したが、同年7月に欧化主義者の井上馨外相による改正交渉が行き詰まると、国粹主義的な日本主義が全国的に広まり始め、¹⁴⁾ 同年9月に宮内省が沖縄県尋常師範学校に天皇・皇后の御真影を下付すると、間もなく御真影の下付が全国の官立並びに府県立学校にも広がった。明治22年12月、文部省は全国の高等小学校にも御真影の下付を通知したが、更に24年11月には下付した御真影と教育勅語謄本とを校内の一定の場所に奉置するよう訓令を与え、こうして各学校に奉安庫または奉安殿が設置されるに至った。

幕藩体制の崩れた明治初年頃から暫く弛緩し勝ちであった地域共同体の団結も、同じ明治中葉期から右翼思想とも結びれて新たに固められたので、田舎や地方都市におけるキリスト教伝道は非常に難しくなり、この頃のカトリック宣教師の報告書には、悲観的な言葉が少なくない。例えば、秋田教会のキュソノ神父(Jean Marie Cussonneau, 1860~90)は、明治23年8月に次のように報告している。

「私たちは、町から出て軽蔑されずに道に行くことは殆ど出来ません。人々は、私達の家まで押しかけて来て、悪いいたずらをします。教会の看板が盗まれたり、門の錠が盗まれたりしました。家に投石されたり、屋敷の樹木が折られたり、壁に汚物が塗られたりすることもよくあります。云々」¹⁵⁾

翌24年8月、秋田教会の巡回司牧を担当していたジャッケー神父(Claude Marie Jacquet, 1856~1927)も、次のように書いている。

「以前に受洗したカトリック信者の多くは、秋田を去って他の地方へ

移り、数人の熱心な信者は死亡し、一人の信者は宣教師を裏切りました。このような事柄の連続は、人々に私達がその布教所を棄てたのだと信じ込ませるに至り、私達の敵は、誇らかに得意がりました。」¹⁶⁾

このような状況は、明治30年代に入ると次第に緩和され、特に東京の諸教会では信徒の自主的活動が盛んになるが、我が国が日露戦争に勝って国際的に高く評価された後の明治40年以降に來日した諸修道会宣教師達も、遅くとも昭和初期には北海道や裏日本、西日本などの諸地方でかなり活発な巡回伝道活動を再開している。しかし、既に述べた教皇庁からの指導と日本の国内事情の変化によって明治中期に形成された、言わば「近代社会の動きから多少離れて生きる司祭像」はカトリック界に根強く定着し、第二次世界大戦直後頃まで、特にパリー外国宣教会員やその指導を受けて叙階された教区司祭達の間で、大きな影響を行使していた。

ところで、カトリック司祭が近代社会や近代思想に批判的な姿勢を堅持し、社会に向かって積極的に出て行こうとしなくなると、社会との関わりの中で生きなければならない男子はあまり教会に寄りつかなくなり、教会内に女子信徒の占める割合が大きく増し始めるが、この新しい状況の中であって、司祭達はどのような生き方を基準としていたのであろうか。次にその司祭像を、この時代に多くのパリー外国宣教会員や邦人司祭達が愛読していた図書の中から探ってみよう。

C 明治半ば以降に普及したカトリック司祭像

当時、近代思想や近代社会を危険視する、この種の新しい司祭像を広めた著作として最も好評を博し、フランス語・ドイツ語をはじめ多くの言語にも訳されて、カトリック界に広く読まれたものは、第一ヴァチカン公会議の時に活躍した英国のマニング枢機卿 (Henry Edward Manning, 1808~92) の著した “The Eternal Priesthood (永遠の司祭職)” (London

1883)とアメリカ合衆国のギボンズ枢機卿 (James Gibbons, 1834~1921)の著した“The Ambassador of Christ (基督の大使)” (London 1896, Baltimore 1897)と云ってよいと思う。

前者は、聖書をはじめ、古代ローマ社会の世俗的風潮に批判的であったヨハネス・クリゾストモス、ヒエロニムス、アウグスティヌスら理想主義的な古代教父の著作、ならびに中世の理想主義的改革者ベルナルドの著作などから数多く引用しつつ、カトリック司祭職の本質とカトリック司祭の理想像を、判りやすく簡潔に論述した著書である。後者は、近代世界の中での日常的具体的状況において、カトリック司祭がどのように考え、振舞い対処すべきかを、無数の先人の言葉を引用しながら、丁寧にこまごまと解説している著書である。前者と比べると、ピタゴラス、プラトン、ケケロ、ホラティウス、プルタルコスなど、キリスト者でない古代の賢人達の言葉やエピソードの引用をはじめとして、近世近代の非カトリック者やアメリカ・インディアンの言葉の引用などもあり、西欧とは多少異なる当時のアメリカの実情に即して、カトリック司祭の生活を考えているという印象を与えている。その意味では、前者よりも一般社会の風潮とその動きに関心を持ち、そこから、司祭生活に役立つと思われることは積極的に学び取って行こうとする姿勢を示している。しかし、積極的に近代の世俗社会の流れの中に降り立ち、その文化と社会を福音化して行こうとする姿勢に欠けている点では、やはり前者と同じ基盤に立っていると言わざるを得ない。

前者は昭和14年に、後者は昭和6年に、いずれも浦川和三郎神父によって邦訳され出版されているが、後者即ちギボンズの『基督の大使』は、原書にない実話を数多く挿入したフランス語の訳書から邦訳しており、訳者が原書の「私」を「ギボンズ枢機卿」に、原書の「我が国」を「米国」に書き換えたり、原書にない日本の特殊事情を加筆したり、原書に読まれるそれ程重要でないエピソードを削除したりしているので、原書とは多少異同の多い邦訳となっている。訳者は更に、この『基督の大使』の末尾に、

フランスのソンメルディユ神学校長ゴンティエ神父 (P. Gontier) の書いた “Règlement de Vie Sacerdotale” の邦訳を付録として付加し、『司祭日常生活宝典』という題を付けている。

どちらの書も、新約時代の司祭職はキリストの神聖な司祭職への参与であり、司祭はキリストとその聖徳を同時代人の前に体現する者でなければならないという観点から、司祭に要求される清さと忠実さを強調している。両書は精神主義的、理想主義的傾向を濃厚に持っていると言つてよいであろう。心の清さを重視するこの立場では、当然女性に対する距離が尊重されると考えられるが、カトリック司祭像と女性の問題については、後述する『司祭日常生活宝典』の中の数ページ以外には、『永遠の司祭』にも『基督の大使』にも殆ど扱われていない。上長・同僚・友人・一般社会・自分の世話すべき信徒などに対する司祭のあり方については、多くの紙面を割いて細々と扱っているのにとすると、これは驚くべきことではなからうか。女性を理想目指して邁進する司祭の心を軟化し危険にする恐れのあるものと見なして、殊更に無視し回避しているのであろうか。

しかし、それとなく女性に警戒させるような言葉が諸所に読まれるし、理想主義的性格の強い論説の弱点はこういう現実的側面に現れ易いと思うので、この観点から両書に探りを入れて見ると、マニングは『永遠の司祭』の「第十八章 司祭館」の中で一度だけ、女性のことははっきりと言及している。それは、「中傷者の毒舌にかからないように、出来るだけ婦人によって婦人達の娯楽を監督させ、司祭が自分でその監督の任に当たってはならない」という、ごく短い一文である。ギボンスは『基督の大使』の「第十三章 司祭の貞潔」を、「貞潔は、司祭にとり最も名誉な、最も特色ある、最も必要不可欠な飾りである」という言葉で説き起こし、聖書、特に「その身を神の神殿」となすことを要求する使徒パウロの厳しい言葉を多く引用し、あわせて聖トマス・アクィナスやサレジオの聖フランシスコらの言葉を引用しながら、貞潔の徳を高く称揚し、司祭の不品行に対して俗人がいかに厳しいか、などを詳述している。そしてこの天使的美徳を保持する

ために、多少自由に箇条書にして要約すれば、

- ① 日頃この美德を尊びいつまでも保ち続けようとの熱望を心に燃やしていること、
- ② 祈りと断食（苦行）でその熱望を強化すること、
- ③ 世俗や女性に接する時には節度を守り、目や口の慎みに努めて、「兄弟の集まりに活気を添えるためなどの口実で、ただの一度でも慎みを欠くような話を口にしないこと」、
- ④ 大食と深酔いに警戒し、有益な仕事に励むこと、
- ⑤ 罪の機会を避け、目を慎むこと、

などの勧めを書き連ねている。¹⁷⁾

この両書に比べると、前述した『司祭日常生活宝典』は、「第二部 交際関係」の中の一節で、「異性との交際については、特に守るべき規則がある」として、フランスの某教区に設けられている次のような規定を引用し、女性に対して堅持すべき司祭の態度について幾分詳しく述べている。

「司祭たる者は、必要でないなら、一人住まいの婦人や歳若い婦人を訪問してはならない。いかなる婦人にも、屢々司祭館に入ることを許してはならない。心霊上の指導は告白場でなし、そのために婦人を司祭館に入れてはならない。婦人に面会する時は応接間を利用し、自室に入れてはならない。用件をすませたら、礼節を守るに必要な程度以上に話を長引かせてはならない。」¹⁸⁾

『宝典』の著者は、続いて助任司祭として〔教会に〕赴任した時の挨拶は至極簡単でよい、主任司祭が信徒に紹介してくれるので、ただ「よろしくお頼み申します」と一言申し添えるだけで十分である、信徒もそれ以上を期待しない、と書いている。しかし、「主任司祭として〔即ち信徒の牧者として〕赴任した時の訪問は、これとは些か趣を異にするデリケートな所がある」として、信徒の家庭に対する主任司祭の訪問を認めているが、そこにも一定の節度を設けている。更に賄いの婆さんについては、次のように

定めている。

「所要の年齢、およびその性格については、教区の規定を厳密に守らなければならない。婆さんの前では、決して聖役上の事も小教区の信徒の事も話さず、兄弟や来客と交わす話は、婆さんの耳に入らないように注意する。……司祭館内で為した事や話した事は、何事たりとも外に洩らすべからずと厳しく戒めて置くと共に、自分も婆さんが外から聞いて来た風聞に耳を傾けてはならない。……婆さんの務めは、庭園の手入れ、司祭館の拭掃除、食糧品の買入れ、料理だけで、その上に手出しをしてはならない。……婆さん当人に対しては、親切と司祭に相応しい威厳とを示し、婆さんの前で、あるいは婆さんに向かって決して怒りを発してはならない。婆さんには、命じられた職務を忠実に果たすように、殊に司祭館を清潔にし、貧しい人や来客を優しく丁寧に接待するように、また司祭が書齋にいる時、勝手に入らないように注意を与え、月々の給料はきちんと支払わなければならない。そして何か少しでも根拠のある疑いが生じたり悪い噂を立てられたりしたら、すぐに暇を出さなければならない。」¹⁹⁾

これらの勧め乃至規定に共通している特徴は、「キリストの代理者としての心の清さと威厳の保持のため、女性に対しては常に慎ましさと一定の距離の尊重とを堅持し続けること」と表現してよいと思うが、「一つの理想論としては全く正論」と言ってよいこのような司祭像が流布し、無数のカトリック司祭志願者が、年若い12歳頃から神学校で、その司祭像を目指す一種の理想主義教育を受けると、近代の具体的社会事情の下では次のような弊害が生じ易いのではなからうか。

1 現実社会の中で何かの深刻な精神的行き詰まりを体験して改心または改宗した人、ならびに幼児からの厳しい教育によって持続的意志力の鍛えられた人を除き、一般にただ美しい理想に憧れて神学校に入って来ただけの志願者は、そういう理想主義的エリート教育、清さ重視の温床的

隔離教育を受けると、実際上「超越」の美名の下に、自分が本腰入れて奉仕すべき悩める人の現実変革のためには指一本触れようとしない人間、少し厳しく表現するなら、ただ口先で義務を説くだけのファリサイの聖職者、世俗社会の外に生活し現実を批判しているだけで、現実社会の中に降り立って社会を内的に変革する力のない司祭を、多く育てることになりはしないか。

- 2 更に、自然の人間性に備わっている健全な性欲を調和よく浄化育成するよりも、それを高い理想実現の妨げ・敵対勢力と見なして過度に抑圧しようとする内心の戦いに籠もり勝ちになり、規則や理想一辺倒の冷たい人、「たてまえ」と「ほんね」が大きく分離している二つの顔の人、暖かい理解と思いやりと人間的成熟に欠けた人になる恐れが、大きいのではないか。

明治後期から昭和初期にかけての日本各地のカトリック教会史を細かく調べて見ると、現実においては、我が国で働いた多くのカトリック宣教師達が、青年期から壮年期の頃に一時的にそういう冷たい性格を見せることがあっても、宣教や司牧の熱心に燃えて活躍している中に、40歳代の熟年期には、そういう冷やかな強さから次第に立ち直って、強さと暖かさとを兼ね備えた人間に大きく成長している。しかし、その陰には司祭生活に魅力を感じなくなって世間に戻った神学生や、宣教司牧の熱意がいつまでも心の中に燃え上がらず、一生をただ義務の外的遂行のためにだけ生きていたと思われるような司祭も少なくなかった。当時は、日本においても外国においても、カトリック神学校教育に何かバランスが欠けていたからではなかろうか。

結 語

福音書を調べて見ると、キリストは弟子達を、困難苦労も汚れも多い世俗の真ただ中で、屢々敵対者達の冷たい監視と批判の眼にさらしながら、

教育していたように思われる。主が弟子達を連れて最後にエルザレムにのぼった時には、ガリラヤから一群の婦人達も伴って来たように書かれている。そして聖霊降臨前の数日間、弟子達は「皆、婦人達やイエズスの母マリア、およびイエズスの兄弟達と共に、心を合わせてひたすら祈っていた。……百二十人程の兄弟達が一同となって集まっていた」(使徒、1、14、15)などとも描写されている。弟子達は、いつも世俗社会と一緒に、婦人達と一緒にだったのではない。強い清いカトリック司祭を養成するには、分離も理想主義も必要であり大切であるが、しかし理想は、苦い現実体験を跳躍台にしてこそ力を発揮するものであって、法規によって一切の危険から隔離されているような所では、現実を変革する力も人々の心に訴える力も失うのではなかろうか。

明治前期のカトリック司祭達は、大きな困苦窮乏の中にあっても、積極的に大胆に日本社会に働きかけ、人々の間にそれなりの高い評価と成果を得ていたが、その後昭和初期にかけて普及したカトリック司祭像には、理想主義と現実主義、男性的傾向と女性的傾向、聖なるものと俗なるものとの調和が欠けていたため、現実社会から隔離された清さの中に留まる司祭が多くなり、実を結ぶことが少なくなったのではなかろうか。これら両方の傾向をバランスよく調和させるのは、綱渡りのように難しい芸当かも知れない。しかし、神信仰と捨て身の愛を身にまとい雄々しく困難に立ち向かうなら、意外と簡単にバランス感覚を身につけ、明治前期の宣教師達のように、行き詰まりを次々と打開するであろう。理想に生きる真に強い清いカトリック司祭も、雄々しく困難に立ち向かう精神とこのようなバランス感覚とを、実践的に磨くことによって生まれるのではなかろうか。極度の多様化と相対化の波が多くの人々の心を不安にしている現代においても、本稿の初めに掲げたような理想を謳歌し、法規や義務を強調するだけでなく、それと並んで実社会の中で理想に生きる実践的指導とそのための地盤造りが、新たに必要なのではなかろうか。

註

- 1) 『司祭の役務と生活に関する教令』第16条。
- 2) 前掲個所参照。
- 3) Cf. “Osservatore Romano”. ドイツ語版, 1976, Nr. 33, p.3. 同紙所載の各年度統計も参照。
- 4) Cf. Hubert Jedin, *Handbuch der Kirchengeschichte*. VI / 1 (1971), pp.326-360, 416-421, 456-461, 488-493, 554-556.
- 5) “Les Missions Catholiques”. No.150, 19 avril 1872, Correspondance—Japon.
- 6) 拙稿「明治前期」『つきじ』献堂百周年記念号, 築地カトリック教会昭和53年12月25日発行, pp.55-59.
- 7) 二瓶武爾著『天主教の新潟渡来とその伝播』, 佐久間書店, 昭和17年2月15日発行, pp.22-32 参照。
- 8) 拙稿「明治前期のカトリック千葉県伝道」『宗教研究』第57巻第4輯(1984年2月), pp.273-275. 拙稿「明治大正期のカトリック千葉県伝道」『聖母と共に——千葉宣教の百年』, カトリック西千葉教会昭和58年11月23日発行, pp.26-72.
- 9) Johannes Dominicus Mansi, *Sacrorum Conciliorum Nova et Amplissima Collectio*. Vol.49 (Graz 1961), pp.107-178. 教皇の不可謬性に関する提案は, 同所 pp.127, 131, 161-162, 166, 171.
- 10) 拙稿「ピウス9世の生い立ちと公会議招集までの歩み」『南山神学』第2号(1979年9月) pp.115-126 参照。
- 11) Cf. “Acta et Decreta Primae Synodi Regionalis Japoniae et Coreae Nagasaki habitae, A. D. 1890”. Hongkong 1893.
- 12) 拙稿「明治23年のカトリック日韓合同教会会議の性格」『宗教研究』第52巻第3輯(1979年2月), pp.149-151.
- 13) Cf. “Acta et Decreta Primae Provincialis Synodi Tokiensis, A. D. 1895”. Hongkong 1896. 拙稿「明治28年のカトリック東京教会会議」『宗教研究』第53巻第3輯(1980年2月), pp.133-134.
- 14) 『天主の番兵』118号, 明治20年4月1日発行, pp.481-483. 前掲の拙稿「明治大正期のカトリック千葉県伝道」pp.74-75, 79, 81-83 参照。
- 15) “Société des Missions Étrangères Compte Rendu”. Paris 1890, p.40.
- 16) “Société des Missions Étrangères Compte Rendu”. Paris 1891, p.41.
- 17) James Gibbons, *The Ambassador of Christ*. Chapter XIII, pp.131-141. 邦訳では, 『基督の大使』第十二章, pp.155-167.
- 18) 『司祭日常生活宝典』(『基督の大使』所収), pp.556.
- 19) 前掲書, pp.558-559. 原書の中での欠落か訳書の中での欠落か未確認だが, 婆さん

務めの中にもう一つ、洗濯を挙げ忘れてるように思われる。

The Image of the Catholic Priest from the Meiji to the Early Years of the Showa Era

Gen AOYAMA

The Second Vatican Council sang the praises of the ideal priest and reiterated the ecclesiastical law of sacerdotal celibacy in the decree on the ministry of priests. This is completely alright in itself, since the ideals of the priesthood has become badly blurred by the abundance and variations of the present day world. If we consider, however, the fruits of the Council, we are maybe forced to admit that only emphasizing ideals was not enough to keep priests strong and committed as they try to cope with against the increasing modern unbelieving world. What are we still lacking? The present study tries to furnish some data on this subject.

It describes in *Chapter A* the vivid figure of Catholic priests in Japan in the first half of the Meiji Era (1868~1912). In those days priests were very active and adventurous in order to push on with the modernization and westernization of Japanese society, which was opened for the Europeans and for the Americans since the year 1859. Many priests studied in the seminary of the *Missions Étrangères de Paris* before the First Vatican Council (1869~70). They came to Japan with bold dreams and burning zeal for the evangelization of the Japanese people. They often made long trips to rural districts facing many difficulties in visiting their friends or Christians, who also made every effort to spread the Christianity and to develop their homeland. The results of

the mission of the so-called ambulant missionaries were great. Priests were also regarded by some people as standardbearers of social progress.

Chapter B describes the radical change of the situation in the 1890's caused partly by the Roman See after the First Vatican Council and partly by the nationalistic development of Japanese society after the promulgation of the Japanese Imperial Constitution (1889).

Chapter C treats of the image of the Catholic priest presented in the books read by many Catholic priests in Japan under this difficult situation, especially Henry Edward Manning, *The Eternal Priesthood* (London 1883) and James Gibbons, *The Ambassador of Christ* (London 1896, Baltimore 1897) and P. Gontier, *Règlement de Vie Sacerdotale*. The author notices the strong idealistic conservative character of these books, particularly in their attitude towards women. The priests educated in such thought no longer felt the need to go into Japanese secular society to bring the message of Christ; rather they waited in their mission stations for personal visitors. This passive unsocial attitude had bad results for the Church, and many Japanese Catholics left the Church. Although the Catholic missionaries later changed this attitude, the difficulties of mission activities continued until the early years of the Showa Era.

Ideals, of course, have a value. But the priest must also be a realist, like Christ who came to save the people and seemed to go out positively into the suffering world. He seemed to teach His disciples very often in the open air and rarely in some peaceful quiet house. To keep a balance of idealism and realism, of deep prayer and activity in difficult times, is maybe not so easy, perhaps, as ropewalking. But it seems to be highly possible, if one has an ardent zeal for evangelization. This, it

seems, results in a priesthood which is strong, active and Christ-like.